

産科におけるミルク及び母乳アレルギーの現状と対応

～症例検討とアンケート調査から～

真田産婦人科麻酔科クリニック

○陶山美佳 松浦和子 内川加代子 酒井康子 永江里美 鄭香苗 野口あけみ 久保ちずよ
川村京子 向千津子 高丘直美 高柳典子 吉村紀子 平川俊夫 平川万紀子
佐賀大学医学部看護学科 山川裕子 福岡女学院看護大学 福澤雪子

【はじめに】

母乳育児が推奨されている現在において、入院中にミルクを授乳する機会は少なくなり、退院後に初めて母乳不足や様々な理由でミルクを補足することによって、突然児にアレルギー症状が出現する可能性がある。また母乳アレルギーの場合も、必ずしも初回哺乳の時点で発症するとは限らず、退院後発症する可能性は十分にある。そのため、母親に対するミルク及び母乳アレルギーについての産後教育が重要となってくるのではないかとと思われる。今回、当院における過去2年間のミルク及び母乳アレルギーの発症例について検討すると共に、産科領域における実態と対策について調査し、今後の課題を明らかにしたいと考えた。

【研究方法】

1. 症例検討：当院における過去2年間のミルク及び母乳アレルギー発症4例の状況を検討する。
2. 福岡県下の産科施設30箇所に対するミルク及び母乳アレルギーに関する自記式アンケート調査。
倫理的配慮：個人及び施設名が特定されないように配慮した。

【結果】

1. 症例報告：初回ミルク投与時にアレルギーを発症した2例、母乳栄養中にアレルギーを発症した2例。
2. アンケート調査の結果：回収数22施設(回答率73%)。産科施設において、アレルギーに対する認知度は必ずしも高くないと考えられた。ミルクアレルギーについて「殆ど知らない」「全く知らない」と回答した施設は13%、母乳アレルギーについては30%あり、「よく知っている」「少し知っている」と回答した施設でも、治療法や発症時期・発症率など詳細な内容についてはほとんど知られていなかった。また、両アレルギー共に発症例の経験を持つ施設は少なく、母親への予防的教育はあまりなされていないことから今後検討の必要性が考えられた。

【考察】

ミルク及び母乳アレルギーに対する認知度は母親のみならず医療従事者も十分でないため、今後情報を共有し認識を高めていく必要があると考えられた。特に産科施設では、予防的教育と発症時のフォロー、及び母親とその家族に対するサポートの在り方について、今後とも検討が必要であると考えられた。